

# 警官の目で 社会に挑む 佐々木譲

1950年  
北海道夕張市に生まれる。

高校卒業後、各種のガテン系職業を体験（大型特殊免許所持）。広告代理店を経て、自動車メーカー宣伝部に勤務。このころから小説を書き始める。

1979年  
『鉄騎兵、跳んだ』でオール讀物新人賞を受賞し、作家デビュー。

1990年  
『エトロフ発緊急電』で日本推理作家協会賞、山本周五郎賞、日本冒険小説協会大賞をトリプル受賞。

2002年  
『武揚伝』で新田次郎文学賞を受賞。

2003年  
『ユニット』を刊行。

小説中に出てくる警官を描くために取材を重ねているうち、警察担当の記者や警察関係者との人脈ができる。このとき、彼らから聞いた冗談のようなスキャンダルの話が、後に北海道警の福原警部事件となって発覚。衝撃を受ける。その後、裏金事件の詳細を知りたいと、警察小説を書きたいと思うように。

2004年  
初の警察小説『うたう警官』を刊行。

2006年  
駐在警官を描いた『制服捜査』を刊行。「このミステリーがすごい! 2007年版」(宝島社)第2位にランクイン。

2007年  
『警官の血』を刊行。「このミステリーがすごい! 2008年版」(宝島社)第1位に輝いた。直木賞候補にもなる。



## 『警察庁から来た男』 角川春樹事務所

北海道警察本部に警察庁から特別監査が入った。監査にやってきた警察庁キャリアの補佐役を要請されたのは、百委委員会で警察内部の腐敗を証言した刑事だった。キャリアのプライドとノンキャリアの意地がぶつかる道警シリーズ第2弾。

## 『制服捜査』 新潮社

組織の不祥事により起こった玉突き人事のあおりで、北海道警察本部の横行犯係の捜査員から単身赴任の駐在勤務となった川久保巡查部長。捜査の第一線に加われない駐在警官の刑事魂が、町の犯罪を次々と暴いていく。

## 『警官の血』(上・下) 新潮社

戦後後の60年間を通して、警察官3代の生き様を描く大河小説。谷中の天王寺駐在警官だった安藤清二と、父の志を継いで警察官となった清二の息子・規雄の死因に、孫である3代目の警察官・和也が迫る。

## 『うたう警官』 角川春樹事務所

警察の内部機密を暴かれることを恐れた警官組織が、証言台に立つ予定の刑事に警官殺しの容疑を告げ、射殺命令を下す。口封じを画策する警察に対抗し、彼の無実を信じる同僚刑事たちによって極秘捜査が始まる。北海道警察本部が舞台。

